[815] オトアン　　2011/12/28(水) 14:30　　[削除]
[公演名] 赦しの聖誕劇　テンペスト　[劇団名] ＫＵＲＩＴＡカンパニー
　　テンペストは、ＫＵＲＩＴＡカンパニーとしてはじめてスタジオＢで観て、へえ面白いじゃん、と思った作品。いろんな粗もある台本ながら、それを超えた面白さや感動があり、能楽堂とは違う軽やかさカジュアルさが新鮮だった。その後、能楽堂でやったバージョンでは、伝統芸能を取り込みながら流石に堂々とした芸術作品になっていた。そして今回の万代市民会館。すべてが全く違うバージョンなのは相変わらず凄いと思う。今回は、降誕前夜、クリスマスイブが意識され、随所にクリスマスソングが散りばめられ、しかも万市特有の真紅の幕を背景にピアノとベースの生演奏がジャジーに行われるという、エキストラサービス満点の公演。個人的には、別にクリスマスソングでなくてもいいのではと思うのだが、しかしカーテンコールでの合唱まで含めて、客席も取り込み楽しませる上質のエンタテイメントであった。
　上演前から鎖に繋がれたキャリバン(大家貴志)が板つきで、開演口上も務める。もはやカンパニーに溶け込んだ感じ。そして、ロングコートに身を包みワインの瓶と杯を持ってプロスペロー栗田氏が登場。水がワインに見えるのはまさに魔術かカナの奇跡のようだ。使役される妖精たち(岡崎加奈、大門和佳子、長井香奈美、大渕聡子)は、エアリアルの配下で、メイド的でもあるシックな服装ながら大活躍。いきなりナポリ王アロンゾー(今井明)、弟セバスチャン(星野哲也)、簒奪者アントーニオ(荒井和真)をひっ抱え、瓶から水を振りかけながら登場するのにはびっくりだが、嵐に襲われ、しかもそれがプロスペローの魔法によるということを非常に上手く表現していた。さらに驚くのは、山賀晴代がナポリ王子ファーディナントと妖精エアリアルを兼ねること。妖精たちの手により繰り返し着替えるのだが、それがスムーズで、かつ男役の宝塚的な凛々しさと、エアリエルの超然とした姿をよく演じ分けている。歯の浮くような甘い台詞で愛を語るファーディナントの馬鹿っぽさが、いやみにならない。そして、別のバージョンでは使役されているプロスペローへの不満ももらしていたエアリエルが、今回のバージョンではより忠実にプロスペローの意を果たす姿で演じられている。ミランダは永宝千晶が演じるが、山賀ミランダとはまた違う、無邪気で世間も汚れを知らない純な娘を演じ上げ、また随所で素晴らしい歌を聴かせる。メインロールのひとりとして堂々たる姿。悪役？三人が、やたらあっさりと反省してしまい、その改心の段階や心情が描きこまれていない点が難しい話だと思うが、無言で立つ姿の中で、表情によりその複雑な変化する心情を示した荒井氏たちは流石。プロスペローの赦しに至る心情も、細かく書き込まれているわけではない。し

かし、もはや憎しみや復讐に縛られることに疲れ、和解を望む彼の姿は、(もちろんエネルギッシュなのだが) どこか疲れているような栗田氏自身の姿と重なって、説得力がある。赦しの聖誕劇、なるほどと感じた。カーテンコールで、珍しく？はしゃぐメンバーの姿が楽しい。

[814] オトアン　　2011/12/28(水) 13:37　　[削除]
[公演名] 華やかな不在　[劇団名] 劇団カタコンベ

とても、よかった。すべてのひとに観てほしいとは言わない。受容できるひととできないひとがいるのは当然だから。でも、あなたには届くかもしれないから、とりあえず観てほしい。

…突き詰めればそういうことが言いたいだけなのだけれど、レビューだから多少余計なことを書きます。公私ともバタバタしていて、今冬は黎明期もパラグラフもヤマモダンも観れなかった。そんな中、ギリギリいくつかの公演を観ることができて、いずれも観てよかった。そのひとつにカタコンベがある。

今回の台本(非売品)を見て、驚きつつ納得したのは、テキストの少なさ。16ページ。このホンからあの舞台を思い浮かべることは、観ていない限り難しい。役者に任された部分があることと、台詞というより呟きとともに行われる所作が大きな部分を占めていることからこうなっているのだが、しかし印象として、この90分は実に濃い。そして美しい。

黒っぽい服装の戸中井氏が、舞台奥のドアからゆっくり入って来る。そして、至るところから、ゆっくりゆっくりと　生成りをベースとしたナチュラルな白の衣装で若い役者たちが登場する。小山さんがドアから顔を見せ、黒い(生身の)小山・戸中井、恐らく夫婦、が去って行った空間は、白い、恐らく生身ではない記憶たちが囁く声に満たされる。同一空間に別種の存在が捩れながら同居する構造は、このところ戸中井作品にはよく見られるが、しかし特に今回はきれいだ。理詰めでこれはこう、と説得するのではなく、自然に観ることができる。

「記憶」たちのモノローグは、なんでもないこと、少し悲しかったこと、嬉しかったこと、いずれも私たちの経験とそう変わらないものだ。それが時に他の誰かと絡み合い、会話になる。それは、時に相手を換えながら、切れたり繋がったりを繰り返していく。役者の個人名が使われ、話の内容は、某映像系専門学校や某キッズコースを彷彿とさせ、これが役者のリアルをベースとしながらアテ書き的に作られた芝居であることが見える。自然な発声と表情は、カタコンベ独特で、もちろん役者により巧拙はあるけれど、とてもよく、会話の内容や表情に笑いを誘われ、また「あるある」と感情移入した

りする。しかしそのナリュラルなやりとりはふっと途切れたり、別の話題に繋がったりする。ひととひとの繋がりが、急にわからないものになったり、写真の顔が誰のものかわからなくなったりする。そのことで、必ずしもこのシーンが現実のものではないのだということが意識される。この彼岸と此岸の往還が、いい。記憶は饒舌で寡黙だ。

別れと喪失。死もそのひとつだが、すべてではない。我が子を失ったと思われる、夫婦の悲しみを大枠として、「記憶」の若者たちが眠りにつき、起き上がり、消えていくラストまで、静かな緊張感と同時に暖かさに満ちた、胸に残る舞台。

[813] アゴアゴ　　2011/12/27(火) 13:22　　[削除]

［公演名］関東大会（新潟会場）の感想③　［劇団名］新潟江南高校演劇部「わが星」

観ていてさすが岸田戯曲賞と思った。単純に今大会最も面白い芝居だとも感じた。ただ、原作のＤＶＤを３０分だけ観ていた自分にとっては、そのままやっているだけなのでは？音や動きやテンポなどそのままのような？すべてみて確かめたわけではないのですけど。でも演出者も生徒も何度もＤＶＤ観て稽古したんだろうな-。

すでに上演された作品をやる場合、何を目指して創るべきなのか考えさせられた。役者や舞台や演出者が変われば、全く同じ舞台などそもそも創れないのだから、同じ様な舞台であっても「面白ければ」良いのでは？とも思うし、また、同時にそもそも同じような舞台を目指して創る意味なんてあるのだろうかとも。もし、私がＤＶＤをすべて観ていたらこれほど面白いと思ったであろうかと。もしかしたら「高校生がよくこの芝居頑張ったな。もちろんプロには及ばないけど」と思ったのではないかと。

間違いなく全くＤＶＤを観ていなければ、私が一番面白いと思ったのは「わが星」だった。だけど、観てしまった私にとって一番ではなくなっているのも事実。・・・・・難しい。

[811] アゴアゴ　　2011/12/27(火) 09:28　　[削除]

［公演名］関東大会（新潟会場）の感想②　［劇団名］秩父農工科学高校演劇部「青春リアル」

斬新なセット・斬新な発想・急展開するストーリーでとても新潟県民では思いつかないようなことのオンパレードで最後までお客を引っ張った魅力にあふれた作品だと思います。ある意味もっとも影響を受けた作品だった。ただ、あれが今の高校生のリアルなんだろうか？という疑問を感じた。「役を演じて生きる」「自分の立ち位置が欲しい」「素の自分を出したくない、怖い」

等は今の時代の青春では「あたりまえのこと」であって今さら問題として取り上げるのは「古い」のではないのか？しかもそれを生徒会室の生中継映像をネットにアップする（すばらしかった）という設定の「新しさ」の中に持ち込むことに自分は違和感を覚えた。ただ、優秀賞は当然のすばらしい作品であるとも思う。
[810] アゴアゴ　　2011/12/27(火) 09:23　　[削除]
［公演名］関東大会（新潟会場）の感想①　［劇団名］丸子修学館高校演劇部
今までにないと言うか、ある種「タブー」とされている様々なことに関して、今までにない切り口で迫った挑戦的な上演であったように思う。また、動きやセリフの１つ１つをとっても演出の目が行き届いており見事で、レベルの高さも伺えた。そのような意味でも今大会で最も自分の評価の高い作品だった。ただ、自分の好みでは正直ない。それは、独裁者という存在の在り方にもっともっと迫って欲しかったからだ。独裁者とはどういう存在なのか？その存在は是か非なのか？今必要なのか？などなど独裁者には様々な問題が有りすぎる。この作品の作り方（チャップリンの独裁者をベースにした作り方）でそんなことまで盛り込むことは無理な構成で、むしろ作品が台無しになることは分かっている。だから、評価は高いが好みではなかった。
[809] オトアン　　2011/12/26(月) 12:13　　[削除]

［公演名］ハンニャーズ番外公演　第６弾　くちばしで鳴らすレコード
[劇団名] 劇団ハンニャーズ
いかに番外公演とはいえ、ちず屋の二階でハンニャーズとは、こ、濃ゆすぎるのでは？しかもツワモノ揃いのメンバー６人。次なる動きに向けての挟間に放り込んでくるにしてはヘヴィ、そんな軽いものではなさそう。ハンニャーズ、中嶋氏が求めているのは分析ではないことを百も承知ではあるけれど、この時期のこの公演にはやはり何らかの思いがあるのだろう。ちず屋の二階での公演は、小品ながらピリッとスパイスの効いたものが多く、この空間でのコントにハンニャーズのコントをぶつけてみようというのはひとつの挑戦だと思う。
冒頭、舞台で回り続けるポータブルレコードプレイヤーのアナログさと、背景で紹介されているブログのＵＲＬの現在性が､普通に同時存在している、これが昭和に生まれ平成に生きている僕らのリアルだ。確かに記憶のあるネタが多いのだが、場が変わりまた新たな視点で見えるから飽きないしダレない。ムライ氏がコメントを読み上げながら客席をキッと睨む姿に思わず笑みがこぼれる。とぼけた味が独特なヤマダ氏、ヤマダ氏の無神経な言葉に落ち

込んだり一転元気になって「底なし沼」をかき込むナカジマ氏の姿に笑う。奥さん思いのヨコヤマ氏が真っ直ぐな目でトライするホワイトボードネタに微笑む。相変わらず「ポーカーフェイス」なコイデさんのコケットリィ。キスシーンはちょいキュンとした。そしてげんぱさんの全身から醸し出されるオーラ、全力でぶつかるエナジィにヤラレる。連れは、もうげんぱさんの魅力にはまってしまい、思い出すたび笑ってしまうと言っている。

作品は役者個人とは切り離された独立のものとして存在する面があるけれど、同時にそこに役者の生身がなにがしかリフレクトされていて、それをあえて抑えないこの作劇。万代市民会館などホールの空間できっちり作り込んだナンセンス芝居をぶつけてきていた当時の一発屋と、目の前で生身ゆえのファジィさをも取り込んだコントを繰り広げる現在のハンニャーズはやはり変わってきている。幅というかキャパが生まれている、ということなのかも知れない。いろいろあるだろうけど、応援したい気持ちを抑えがたい。よ。

[803] ステラ　2011/11/07(月) 21:31　　[削除]
[公演名] I 家～　[劇団名] 坂下さん
　　「まあ、こんなもん？」という妥協を良しとせず、過剰な追求を試みるのがチーム坂下さんの魅力だと理解してますよ。
今回の公演においても、その「劇的なる野心」は、舞台美術と制作演出に遺憾無く発揮されていました。

ただし、問題が無かったわけではないんだな。
油断すると絶賛の嵐になりかねない掲示板(笑)なので、あえて記しますけど…
今回の舞台が芝居として上出来であるか？と言えば否であり、その主原因が「セットの縛り」なのだから、作劇は難しいよね。
端的に言えば、舞台美術と俳優のスケールがマッチしていないんだなあ。

勿論、俳優達がサボっていたわけではないんだけど…
公式のサッカーグラウンドで一生懸命フットサルをやってるみたいな「せこさ」を感じてしまった。
「袋詰めの貸し座布団」に象徴されるセッティングの細やかさは、俳優達は勿論脚本にとっても想定外の「リアルタイム」を要求していたんだよね。

ま、セットが頑張ったから悪くなった？て言うのも妙な話なので…
やはり俳優が変わらないといかんのでしょう。

今回に限らず、新潟在住で俳優を名乗る者全員がね。
用意してきた事しか「やらない」「出来ない」では…
やっぱり、だいぶ残念ですから。

ま、そういう事を要求するセッティングを仕掛けた時点で…
チーム坂下さんは、勝利しているのかもしれないけどね。

[802] むらいたかあき　　2011/11/06(日) 19:33　　[削除]
［公演名］Ｉ家の事　［劇団名］演劇ぷろじぇくと坂下さん
　　僕のブログに記事として書きましたよー

[801] 中嶋かねまさ　2011/11/05(土) 18:15　　[削除]
［公演名］「Ｉ家の事」　［劇団名］演劇ぷろじぇくと坂下さん公演 「Ｉ家の事」
　　しみじみと、良い舞台と言うのは、すぐにわかるものだと感じました。シンプルで丁寧でゴージャスな素敵な舞台です。舞台が好きな方は見逃してはいけません。合掌！

[789] くま　　2011/09/20(火) 00:57　　[削除]
［公演名］あんかー・わーくす第６回セルフプロデュース公演　湊物語シリーズ　黄色い砂時計　［劇団名］演劇製作集団あんかー・わーくす
　　「家族の歴史」テーマの戯曲、ナイロン 100℃『ナイスエイジ』を観てしまっていると…。単純に比較するのが間違っているとは知りながら、やはり比べてしまう。時間の制約もあるのだろうけど、まだ、家族のきれいな部分だけをなぞったところまでで終わってしまって不満。ドロドロで、いがみ合って、どうしようもなくて、それでも家族であるというそれだけの事実で結びついてしまう、呪いのような関係性まで描くことを期待してしまうのです。現代において家族をテーマに戯曲を書くというのなら。
新潟という土地が添え物程度だったのも残念。脚本はもっと挑発的なことやって欲しい。というのは、懐かしい風物出して、客のｼﾞｻﾏﾊﾞｻﾏが痙攣的に反応して笑い、結果、生ぬるい空気が醸成され、その場に残るという情景を目の当たりにしたからであって。
この企画が成立した経緯もあるのでしょうが、これじゃあご当地モノ、ご当地接待モノ。
役者のビジュアルと役柄のギャップ、各時代毎の象徴的変化に乏しいこともマイナス。分かりにくい。敢えてなのかとも思いましたが、それならいっそ

現在と過去のビジュアルを混在させるとかやりようもあったのでは？でもメインの客層である方々には伝わりにくいから、これでいいのかな。

内面のなぞりかたは、共感はしないが丁寧だと思いました。
あ、セットは見事。最後部席からは、天井の照明が気になったけど、これは仕方ない。

大半のお客さんは気持ちよく帰ったようだし、そういう意味では成功なんでしょうけど。県内中高生が心底カッコいいと憧れられる作品も期待します。

[788] オトアン　　2011/09/16(金) 14:31　　[削除]
［公演名］ちず屋の２階大行進'11　「齧歯目に団栗」
　　そう、確かにこのストーリーは見ている、知っている、はずだけれど、初めて観たように新鮮。デジャヴ(既視感)に対するジャメヴュ(未視感)かとも思ったが、やはり役者が変われば違う芝居になるのだし、何と言っても脚本、シダジュンの原作に江尻晴子の手が入っているのだ。ん？晴子？･･･ジャメヴュ(笑)。2011 年ちず屋の２階バージョンは、やはり今、ここ、の物語であって、先行公演とは別物だ。演出シダジュン、第二黎明期のテイストをベースにしながら、中央ヤマモダンの江尻らしさ、そして劇団カタコンベでのナチュラルな演技が印象的な熊倉静、若手・新大の近藤招弘。面白い顔合わせ、各才能の融合が新鮮。
　例によってネタバレ。すし詰め状態の２階で身を縮めながら待っていると、暗い中に蠢く女性。明るくなるとエプロン姿の女性(劇団カタコンベ･熊倉静)が生活している姿。何やらにこやかに「誰か」と会話をしながら。そこに「ピンポン」と口で言いつつ登場するずぶ濡れの女性(中央ヤマモダン･江尻晴子)。大きな黒いビニル袋をカバン代わりに下げて、図々しく上がり込む。不審に思う熊倉に、義理の妹として意味ありげな言葉を投げかける江尻。コミカルな中に、疑いや悪意や駆け引きが覗く。どうやら、事故で熊倉の夫が亡くなったことに裏を嗅ぎつけ、弱みにつけ込んで相続に食い込もうという腹らしい。熊倉自身が事故以前の記憶を失っているらしく、互いに腹の探り合いなのだが、どこかピントのずれたやりとりが楽しい。熊倉の、いたいけながらもそれゆえにまたどこか底意や狂気を匂わせる笑顔。ロリ入っているけれどふとドキッとさせる静スマイル。江尻の、のっけから奇矯な言動、そして眼が笑っていないにこやかさ。あたかも兄が自分より年下の女と結婚した妹のような義妹っぽさがそれっぽい。笑顔ひとつにも、無邪気なものから含みの

あるもの、恐ろしいものまで様々だなあ。さらに、同様にビニル袋を抱えて転がり込む男(新大劇研・近藤招弘)。江尻に呼ばれて、というが、どうやら江尻の弱みを握っているらしい。輪をかけて図々しく振る舞いつつも、２つしかないイスを女性たちに占められ立っている姿はかわいくもある。キザとバカは紙一重、と自ら語るのだが、キメキメのポーズ、濃いぃそこそこイケメンで顔もタッパも態度も大きい近藤が、こういうデフォルメされたキャラクタがちょうどはまっていて失笑を誘いつつとてもよかった。

人間３人寄れば派閥が出来る。三者三すくみのような人間関係。お茶をいれたりいれられたりの関係が伏線となり、やがて事態は動く。一番まともに見える熊倉が、近藤と結んで江尻を排除し、その上で近藤も、という悪女ぶりを見せる。さらに、相変わらず見えない何者かとの会話を続け、新たな獲物を招き入れる姿の怖さは、奥州安達ヶ原、黒塚すら連想させる。狭い舞台に１時間弱、ストーリー的には単純、それでいてこんなにも観る側のアタマを掻き回し、パワーを要求する公演。楽しかった。女怖ーい。今度はお茶が怖い(笑)。お後がよろしいようで。

[787] オトアン　　2011/09/13(火) 20:35　　[削除]

［公演名］りゅーとぴあ能楽堂シェイクスピアシリーズ　第七弾　ペリクリーズ～船上の宴～　［劇団名］りゅーとぴあ能楽堂シェイクスピアシリーズ

りゅーとぴあ能楽堂シェイクスピアシリーズは、能楽堂の空間と和的な衣装、象徴化され研ぎ澄まされた所作をシェイクスピア劇に導入して魅せた。その核となる栗田氏を中心に後発で立ち上げられた KURITA カンパニーも、基本的にはシェイクスピアを中心に古典作品を新しい演出で表現し続けている。能楽堂の枠を超えてさまざまな空間でのより自由な芝居を作っているカンパニーのメンバーを中心に、しかしまた敢えて能楽堂の枠を生かした作品を送り出してくる。共通項が多いため一見わかりにくいこの棲み分けだが、違いはきちんと意図されている。能楽堂の場合この空間がまずありきで、同じ演目であってもやはり 2009 年 gt.moo ギャラリーでのカンパニー公演「ペリクリーズ」とは一味違っていた。個人的にはカンパニー公演が好きなのだが。ストーリーは前に書いたし今回省略。

シリーズでは外部からの出演者もあるし、衣装などいろいろ金がかかっている。でも、エッセンスとしての作劇法は同じだ。今回、タイーサが医師セリモンに救われるいきさつやライシマカスのマリーナへの恋情、タイーサがエフェソスで巫女となる顛末、ライシマカスとペリクリーズの邂逅など細かいところはすっと流されて、テキストはよりシェイプされている感があった。これだけ込み入った話、登場人物がちゃんと見て把握できる。中世の詩人ジ

ョン・ガワー（栗田芳宏）が狂言回しとなり、６つの被り物により人物を演じ分ける。メインの客演３人以外、カンパニーのメンバーもそれぞれ複数の役を担う。最小限の記号的なものだけ変えて演技のみにより複数のキャラクタを演じるのはさすが。基本的に役者は舞台上にとどまり続け、出番以外は楽師として脇に控える。地中海の地図が二面に掛けられる他はいわゆる小道具以外に装置などない。いちいち場の説明に物など不必要なのだ。だからこそ東地中海域を股にかけた広大なストーリーが三間四方の空間で表現し得る。このシンプルな力強さは、やはり素晴らしい。

数々の悲劇や喜劇を書き続けてシェイクスピアが行き着いた晩年のロマンス劇は、テンペスト、冬物語などもい含め確かにご都合主義でユルいハッピーエンドではあるのだが､そこに彼が見出した何らかの救いへの希求があり、ありえねーと言いながらつい感動してしまうのだ。運命の波に弄ばれる人間が、しかし生きていくことの尊さ。人生はまさに船上の束の間の宴。そんなにうまくはいかないとわかっているけれど、希望を捨ててはいけないなと思わせてくれる。どちらかといえばマイナーな作品が多くの人に知られる機会となっているのは喜ばしい。

ペリクリーズの柄谷吾史（アクサル）は髭を蓄え、真っ直ぐな主人公を爽やかに演じた。河内大和の妖しさはないが、剣舞やタイーサとのダンスも緊張感はあるが気合で乗り切る。ライシマカスの西村大輔（アクサル）は出番が限られるが、堕落した太守が無垢なマリーナにより目が覚める微妙な変化をきちんと演じる。マリーナの田上真里奈（劇団ひまわり）は、町屋美咲のコケットリィとはまた違うが、純真な娘らしさと芯の強さを体現して好感が持てる。非道な王アンタイオカス、気弱なターサス王クリーオン、高潔な医師セリモン、下劣な女衒ボールトなどを説得力をもって演じ分ける栗田氏は絶品。忠臣ヘリケイナスと売春宿の主人のギャップが見事な荒井和真は華麗なラテン系ギターで舞台を動かす。刺客リーオナインほか、脇のキャラをそれぞれ血の通ったものにしている星野哲也、使いや助手が多い大家貴志はこれから個性を作っていくところだろう。楽師として劇を支える岡崎加奈。カンパニーの１つの顔となってきた永宝千晶は、今回アンタイオカスの王女、ターサス王妃ダイオナイザ、タイーサの侍女リコリダ、売春宿のおかみと八面六臂の活躍。そして山賀晴代はペリクリーズに嫁ぐタイーサの愛らしさから、海上で死に瀕し白布を被って身罷ってからずっと微動だにせず舞台上に留まり、やがて人ならぬ女神ダイアナとして去っていき、巫女となったタイーサが我に返りペリクリースとマリーナのもと、人間の世界に戻ってくるまで、実に凛として美しい。

シリーズを見てきた人には、まだ「余地」があると思われるかも知れない。

でも、新潟にこの公演があることは、胸を張っていいし、多くの人が魅了された公演であることは事実だろう。ブラヴォ。

[786] はやぶさ　　2011/09/11(日) 16:46　　[削除]
[公演名] りゅーとぴあ能楽堂シェイクスピアシリーズ第 7 弾「ペリクリーズ～船上の宴～」
　　9 月に入りたて続けに 4 本の演劇を東京と新潟で観る機会を得た。観劇後のコメントはたいがい、良かった。面白かった。つまらなかった。たいくつだった・・などと劇評以前の紋切り型の感想にしかならないのだが「ペリクリーズ」はそのどれでもなかった。

能楽堂シェイクスピアシリーズは、はじめてだったのだが、あの独特の空間でくりひろげられたシェイクスピアの世界に感動し、びっくりした。語り部役のガワーが言うように観客が想像力をはたらかせ、あの小さな能舞台が変幻自在に目まぐるしく変り、大団円をむかえる。演出の栗田芳宏のしかけたマジックにまんまとしてやられた感じ。気持ちよく酔わせてもらった。感動のラストシーンにむけて、様々な国を舞台にした物語がていねいにつみかさねられる。舞台装置もｾｯﾄも何もない空間で。これには、役者栗田芳宏の存在はあまりにも大きいが、他の若手の役者たちもその実力を存分に発揮していた。照明や生の楽器演奏も実に効果的ですばらしい。最後の感動のシーンには、栗田は直接はからまないのだが「さあ、準備は整えた。あとはお前達が仕上げてみろ。」とでも言わんばかりだ。

一緒に観ていた娘が「やっぱり、ハッピーエンドっていいね。」ともらした。ストーリーだけを追えば荒唐無稽と言えなくもないシェイクスピアだが、いい年をした大人の私もハッピーな涙をながしてしまった。
クリスマスに行われるというＫＵＲＩＴＡカンパニーの次回の公演「テンペスト」にも大いに期待したい。
[782] オトアン　　2011/09/05(月) 14:19　　[削除]
[公演名] あんかー・わーくす第６回セルフプロデュース公演　湊物語シリーズ　黄色い砂時計　[劇団名] 演劇製作集団あんかー・わーくす
　　スタジオＢでこれだけきちんとしたセットを観たのはあまり記憶にない。りゅーとぴあ劇場の県外劇団公演くらいかな。こういうのが観たかったのだ。下手側、客席に対し角度をつけた居間の作り。柱で内外を区切り、板張りの壁を上手く省略。縁側があり、三和土まできちんと作られている。室内への出入りは奥、下手奥、縁側廊下からの３カ所使い分けられる。草も

生えるセミパブリックな路地空間を挟んで上手の工房は磨り硝子窓から灯りが見え、トタン壁の錆具合もいい。舞台奥の暗がりが空間の広がりを演出する。細やかな照明。沁みる音楽。流石、「裏方稼業」のあんかー・わーくす。いつもこんな凄いものはできないだろうけど、リアル系の芝居にはこういう努力がほしいといつも思う。オールカラーの美麗なパンフも含め、力の入った公演だ。

鱒島医院院長・信夫(岡英彦)が亡くなり集まった身内。未婚のままずっと父を看ていた長女・桃子(斎藤千佳)は妹たちに不満をもらす。40代半ばの年齢感が出ている。次女・百合子(荒木由美子)はかつて隣の砂時計工房の出入り業者で今は脱サラしパチンコ経営をする調子のいい城井達郎(小池匡)と結婚している。次女らしい？遠慮なさ。東京に出た三女・すみれ(大作綾)は、末っ子の奔放さとぶっきらぼうさの裏にわだかまりを隠す。そして長年医院に仕えてきた看護師の里見聡子(山本淳子)。品のいい老け具合。そして遺品とも言うべき、砂が落ちない黄色い砂時計が出てくる。里見の知らせで駆けつけた隣家の砂時計職人・大野義和(佐藤任)に、母・菊恵(まちゃ)との秘密について激しい言葉で詰るすみれ。黙って立ち去ろうとする義和は、里見の説得で昔あったことを訥々と語り始める。

昭和 38 年、近所の幼馴染みだった義和は病弱な菊恵にほのかな思いを寄せていたが、菊恵は信夫に嫁ぐことになる。医者に嫁げば経済的にも健康的にも安心だと、義和はそれを受け入れており、菊恵も義和の優しさに好意を持ちつつ幸せになろうと決意する。同級生・白山鶴子(石附弘子)は義和の思いを知りつつ彼への思いを胸に秘め東京に越す。今の若者に比べて何ともウブで、かつ大人であった当時の十代。自分の親の世代。このママゴトっぽいやりとりは、当時の実態に近い。義和は砂時計工房の跡を継ごうと失敗した試作品の黄色い砂時計を菊恵に渡す。娘たちに恵まれ(子どもの演技に微笑)、思ったより元気に楽しく日々を送っていた菊恵は、義和のお見合い(のち破談)を機に約 20 年持っていた砂時計をそっと捨てるが菊恵と義和の思いを知っている信夫はそれを拾い出して隠す。娘たちそれぞれの色で作った砂時計は一家の大切な宝になり、それぞれ成長していくが、昭和 62 年、菊恵は胃癌を発病。信夫は隠すが、菊恵はそれを知ってしまい、義和にすがって泣き崩れる。それを帰ってきた信夫とすみれが目撃。信夫は黙って去り、すみれは誤解を抱える。平成元年、菊恵の容態悪化、死に際して診療を理由に行こうとせず菊恵が本当に愛している(と信夫が思っている)義和についていてやれという信夫、信夫を呼び続けているから早く病室へ行けと迫る義和が揉み合う中、菊恵が亡くなる。互いが互いを思いやるがゆえのすれ違い。こういう人たちが、確かにいた。こうして義和は鱒島家と疎遠になる。

事実を知った娘たちは、昔を思い出し、また互いへの気遣いを思い出す。これは親の世代にあって子の世代に欠けていたものだ。路地のベンチを上手く使い、出棺のシーン。想い出の忘れな菊を手向け、義和は夜を徹し直した砂時計を供える。涙をそそられる。エピローグ。亡くなる直前、惚けつつあった信夫が、居間の縫いぐるみの中のマトリョーシカから、あの砂時計を見つけ出し慟哭する姿。

非常にストレートで、いわゆる悪い人が出て来ない、屈折のない話。セットも、独白による進行も、そして演技の質も(個人差はあるが)かなり新劇的というか人情劇的、浪花節的、かなりクサいところがある。ただこの芝居に関しては合っていると思う。現実そのものの生中継ではなく、デフォルメされた演技の中から抽出された「真実」に、観る者の何かが感応する。普段演劇をあまり観ないような(すみません偏見です)年齢層高めのお客様方の胸に、話がすっと落ち、感動が広がっていく様を見た。ローカルな地名、時代感ある名称は、無論地域的時代的にヒットする層はあるが、物語の力はそれを超えて広がる。

五月蠅いことを言うと、衣装やメイクをいじらず年齢を演じ分けようという意図はわかるが、里見や桃子が上手く老けたのに比べ義和の年齢がわかりにくい。平成 23 年でニットキャップでもかぶらせ額を強調すると差が出るのでは。また作業着が新しすぎる。せっかくの砂時計、デザインを揃えてもよかった。うん、でもいい話だった。

[781] オトアン　　2011/08/24(水) 17:09　　[削除]

[公演名] スーホの白い馬　[劇団名] りゅーとぴあ演劇スタジオキッズ・コース　ＡＰＲＩＣＯＴ

APRICOT はここ数カ月、いや 2011 年はずっと、このモンゴリアンな世界にいたのだなあと思った。10 周年。あっという間のようで、育ってきた、巣立って行った、面々を見ると、確かに時は積み重ねられてきたのだとわかる。OBOG こんなに立派になって(涙)と APRICOT と何の関わりもない自分にすら感じさせる、充実した公演。一部二部合わせて二時間を超える大作、しかもストーリーを端折りつつ大急ぎで展開するような、とてもボリューミィで中身の詰まった話。一部だけ、二部だけ、あるいはどこか取り出すだけでも十分公演として成り立つのだが、全部通して観ることで湧いてくる感慨が確かにあって、それが目指されていると感じる。Ｂキャストを観たが、少なくとも自分は最高だと思った。しかしＡ～Ｅまで５パターンそれぞれのキャストによって毎回がワンアンドオンリーな作品だろう。

一幕。理不尽な王のために死んだ父に代わって馬の世話をする少年モドン・

シャナガと、母を含め身内を殺された少女グンジドが出会う。18 歳になり、奴隷 10 代目は自由になれるという掟により自由の身となったモドンとグンジドは結婚し、娘のアローハンと一頭だけ与えられた小さな白い馬とともに幸せに暮らす。しかしグンジドに横恋慕する王の息子がモドンと馬を捕らえ、グンジドを脅迫する。グンジドは脅しに屈せず死を選び、鳥を呼ぶと鳥の群れが王の息子を襲い死に追いやる。モドンは白い馬とアローハンを連れて逃げる。追っ手が迫るが、鳥の囁きで次々に難局を乗り切り、逃げ切るが、白い馬は力尽き倒れる。モドンはその馬の骨、皮、毛から楽器「馬頭琴」を作る。娘アローハンは結婚し、子や孫に恵まれ、小さな集落で平和に暮らすが、ある時他部族の攻撃によって集落は全滅する。ただ孫のスーホを残して。絶望し死を願うアローハンだが、母の幻が彼女に強く生きることを説く。
二幕。祖母アローハンと暮らす少年スーホは、草原で小さな白い馬を助け育てる。やがて馬は成長し、少年と馬は誰よりも速く草原を駆けるようになる。都では王が競馬大会を催し、一等には娘との結婚を許すとふれを出す。以前王の娘を見かけて惹かれたスーホは競馬に出場し見事優勝するが、みすぼらしいスーホに王は娘を与えようとせず、金 3 枚で白馬を手に入れようとする。拒むスーホを痛めつけ、馬を取り上げる王。しかし馬は囲みから逃げ、無数の矢を受けながらもスーホのもとへと辿り着く。そこで力尽きる。スーホはその骨と皮と毛で馬頭琴を作る。その評判が広まる。圧政に耐えかねた民により王は追放されて死ぬ。王の娘は、アローハンの母と縁続きであったかも知れない少女だった。娘はスーホのもとへやって来て、2 人は結ばれ、やがて生まれた娘にアローハンは母グンジドの名をつける。

この円環をなす世界観はアジアの普遍的なものだ。歴史は繰り返す。しかしその中で必ずよりよい方へと螺旋は上へと向かう。原作を再構成し、膨らませ、独自の文脈で壮大なドラマが作り上げられる。その中で歌い上げられるのは、悲しみと苦しみに耐えながら、打ち負かされることなく、生き続けること。愛しいもの、ホンゴルのために命を捧げること、新しい命のために犠牲となったものたちを忘れることなく、その命をつなぐためにも生きること。理不尽な悪に自ら抵抗するのでなく、やがて正しい報いが訪れることを信じて、堪え忍ぶ。その悲しみや苦しみは、決して空しいものではないということ。時代や地域を超えた大きなメッセージ。単純な勧善懲悪でなく、どうしようもない悲しみを観ることは、子どもたちにとって実に大切な経験だと思う。

個人的にはモンゴル人でなく日本人のメンタリティだなと感じた。歌によって心情が述べられることや、「正しい」メッセージ性への躊躇や抵抗感はあるのだが、決して押しつけにならないのは、やはり純粋な子どもたち・青年

たちが真っ直ぐに語り、歌い、動くことによる。馬のシルエットを作り出し、馬の群れや風などさまざまなものを現出するコロスたちの素晴らしさがまず上げられる。Ｂでは少女グンジド三浦真由が凛としてすばらしい。成長したグンジド安藤裕美のすらりとした姿が美しい。青年モドン石本健志の折れない心。少女アローハンの伊田優月の真っ直ぐさ。一幕の王・杉山果歩、息子・横山天音、二幕の王・吉田千尋、いずれも女性ながら仇役を力強く(憎げに)演じて見事。王の娘・栗林紗美は緊張感もあったが可愛らしい。成長したスーホ小柴多郎は、大きくなったなあ。少年モドン塙正之、少年スーホ伊藤壮史は、素直で健気な少年の爽やかさがある。そして老女アローハンの高汐巴。凛々しい発声としっかりした立ち姿で、子どもたちを支え舞台に芯を与える。ピアノ野瀬珠美、ヴァイオリン庄司愛、チェロ渋谷陽子の生演奏。衣装。多くの大人たちの力に支えられながら、光り輝いた少年少女たち。ブラヴォ。

[780] さぼてん　　2011/08/22(月) 13:15　　[削除]

[公演名] スーホの白い馬

感想を書く前にはっきり書いておかなくてはならない・・・。りゅーとぴあは、小劇場ではない。でも感想を書いてしまおうと思う。

生きる人間達の姿をまざまざと見せて貰うことができた。

グンジドは、誇りの中に散って行った娘だった。誰しもとはいわないが、きっと、どうしても許せない情況に出会ったとき、グンジドのようにしたいとは思わなかったか。それを実行するのは果たして勇気か。果敢だが、人間以上のもののために生き、死んだ。きっと、「天と人間達の間の約束」の守り人の声を聴くとは、そういうことなのだ。これは私のエゴだが、私は、グンジドを、強い人間だとは思いたくない。

モドン・シャナガは祈るということを知っている。そのモドンの、「生きていたくない！」の絶叫は、登場人物の誰しもが味わったであろう悲しみを痛切に表していたと思う。

アローハンは、やはり、モドンとグンジドの娘だと思った。誇りと、悲しみに耐える力をもっていた。

王は、暴虐の中に人間の味わいを感じさせた。演じている人間のまなざしがそうさせたのではなかろうか。そう生きざるを得なかった一個の存在の哀切すら感じさせた。「善い行い」と「悪い行い」の天秤にかけられる存在として、見事だった。

アローハンの孫、スーホは、まさに、輝くような駿馬のような若者だった。白い馬を拾ったときの、「どんなことでもする」には、凄みがあった。
王の娘のアローハンは、威厳があり、姫に相応しかった。

以上拾い書きにすることしかできなかったが、この、人間達の物語の題名が、何故「スーホの白い馬」なのか。それは、物言わぬスーホの白い馬が意味するものが、駆け抜ける物語そのものだからなのではなかろうか。そうしてそれは、この舞台では、取りも直さず、色とりどりの衣装を着て、時に走り、時に歌い、時に言葉を投げかけた一団として具現化していた。素晴らしかった。
最終幕、「白い馬、お前と、もう一度走りたい。」のスーホの怨念、情念。それは、生涯の友となった馬頭琴を演奏することで解けたのだろうか。そうは思わない。悲しみを抱えて、生きていく。きっと、そうなのだ。いつの日か、白い馬と同じように、空にとけていくまで。

「子供は凄い」と、よく言う。だが、やはり、その底力、もしくは伸びていくその先端の力をここまで、用意した舞台で見せつけられることは、そうそうないだろうと思った。

[779] 猫影　　2011/08/21(日) 12:50　　[削除]
[公演名] スーホの白い馬　[劇団名] APRICOT
　　費用対効果（！）がえらい事になっている。この舞台を 1000 円でりゅーとぴあ劇場でみることができる、などということが、満員の客席のひとたちと若い出演者連中が当たり前だと思ってしまったら新潟演劇界はたいそう困ることでしょう。
新潟アマチュア演劇界ではダントツの観客動員数を誇るグループになりましたね。APRICOT。
周りを固めるオトナの技術屋たちが真剣にならざるを得ない純なエネルギーの塊。何もかも吸収して、それに未知の輝きまでプラスして舞台の上で解き放つことができる役者たち。
確かに、やめられませんわ、これは。

ストーリーは壮大すぎて、1 幕 55 分、休憩 20 分をはさんで 2 幕が約 60 分と、たっぷり時間をとってもまだ、端折っている感じがアリアリとしていた。あと、劇中で人が死にすぎる。これは台本の構成だからまぁ、仕方が無い。オープニングからマスの動きがすばらしい。よく稽古されている安定感で安

心して物語の中に入ってゆける。

観客の想像力をかきたてる演出と振付けは舞台上で刻々と変化する大勢の役者や幾筋もの長い布から目を離すことを許さない。もちろんしなやかで大きな白い馬からも。

2 幕の中盤から後半にかけて（王の娘が語るあたりから）舞台上の人数が少なくなる場面で冗長さを感じたのは・・・こちらの集中力の足りなさもあってのことだったと思う。

でも、確かに大勢で演技し、踊るシーンはどこも素晴らしかった。

APRICOT誕生10周年記念公演という事で元宝塚のトップスターをゲストにしたり、APRICOT の卒業生や、出演者のご家族まで役者として登場するという、ちょっと聞くと「ありえなーい」クオリティになってしまいそうな舞台を、まったく澱みなく見事に創り上げ、あまつさえ将来の希望や可能性を感じさせてくれた。

大きな舞台の醍醐味をご馳走様でした。
[776] すて　　2011/08/01(月) 23:15　　[削除]
［公演名］劇団カタコンベ・劇団ハンニャーズの過渡期について
　　斉藤センセが感想かいてますよ。
チェキラ
↓

http://www.human.niigata-u.ac.jp/~y.saito/writing/july.html

↓
戸惑いの７月

[775] すてるす　　2011/08/01(月) 02:53　　[削除]
公演名］四万ー四　［劇団名］はんにゃーず
　　すんごく一生懸命、面白いことや楽しいことをつき詰めた結果が『ドリフターズ』だった！
ドリフターズの「凄さ」を再評価は嬉しいのだけれど…
(無自覚かな？)

だからと言って、今回が「ドリフターズ的」に成功しているわけでもないんだよなあ…

結果的に、役者体が弱いんですよ。
全然、必要な「持ち時間」をさばけていない。
志向性がぶれないのは大成功！なんですけどね。
しかし、その分…
弱点は、はっきり見えてしまいますね。

でも、それでいいと思うんです。
十分楽しめたし、それでいて課題も明確。
収穫と課題がマルッと手に入るなんて…
ちょっと、奇跡的に良い公演なんじゃないかな？

ただ…
そろそろ『お祓い』とか、考えても良いよね、マジで(笑)

[774] オトアン　　2011/07/30(土) 23:56　　[削除]
[公演名] シーマンフォー　[劇団名] 劇団ハンニャーズ
　　以前にも書いたことがあるけれど、芝居を見ることは個人的な行為で、感想もまた極めて個人的。だから、僕が面白くないと思うものを面白いと評価する人がいても、僕が面白いと思うものを面白くないと評価する人がいても、どうしようもないし、どうでもいい。もちろん、一緒に笑えるのは楽しいけれどね。
　個人的な思いを抱えながら、それでも舞台上の役者たちと、客席にいる観客たちと、僕は何かを共有する。だから、芝居はいいな。余談余談。
　1999 年、万代市民会館のホールならぬ小さな一室で見たシーマンは衝(笑)撃的だった。演劇的な枠を壊していくナンセンスさに、笑った。数ヵ月後、長岡リリックのスタジオでまた笑った。ここから、一発屋に大きな変化が訪れることなど気づかずに。あれから 12 年。一発屋・ハンニャーズはさまざまなことを経験してきた。僕は僕の時間を生きてきた。決して一緒に歩んできたなんて言わない。でも、その存在を感じながら、それぞれの時を必死に泳いで、こうしてシーマンフォーを観ている今がある。
　こういう感慨をずらずら書いたのは、この芝居が中嶋氏の個人的な感懐を色濃く反映させていると思うからだ。あまりにパーソナル。だが、本人にしかわかり得ないはずの個人的な思いこそ、誰しもそれぞれ持っているという

点で普遍的なものに繋がる。以下ネタバレ有り。
　シーマンフォーは、シーマンとは異なることがパンフレットに書いてあったが、いざ始まってみると、別芝居のキャラ、待ってました池の精オネイチャン(近藤聡実)をフィーチャーした冒頭のプレゼントコーナー(笑)はともかく、アナウンスから始まって展開される劇場でのスタッフのドタバタ、そしてフィリップ(中嶋かねまさ)とモリス(平石一仁)が乗る連邦軍のギガサリアンと帝国軍ファイネストトゥバコス将軍(村井孝明)のスーパーロボットアニメ的バトルシーンなどのザッピングが繰り返され、観ているもののアタマが掻き回される。このあたりはシーマンの枠組みが使われている。これは、たとえネタがわかっていてもその枠組みを面白がることができるものとしてあえて提示する、確信犯的な演出だと思う。実際、ついまた笑ってしまった。しかも、帝国軍の攻撃を受けている町の寺がかつては劇場で公演中火事のため客が死んだという話が挟まれ、入れ子構造の内側がひっくりかえって外側になったりする。演劇スタッフが一休さんのポクポクチーンを効果音として録音しようとしたエピソードと、シーマンバリヤー解除の共鳴音としての寺の鐘が重ねられたりする。結構辻褄を考えに考えて、話が繋がるようになっているのだが､それはわからなくてもナンセンスの力技で笑い飛ばせばいい、というスタンス。
　でも、やはりシーマンフォーはシーマンフォーだ。池の精を挟んで中嶋・平石が繰り広げる会話のシーン。恋をしてしまい相手の気持ちを量りかねる平石。ある女性から、自分の時間が詰まっているという謎めいた言葉とともに貰った箱を抱えて思いを巡らせる中嶋。恐らく肺癌のため去って行く女性の、込めた思い。それを思う男の切なさ。終わりのある永遠。だから、好きになるんだ。寸断されるこのシーンが、実は肝だ。ちょっとね、泣く。自作のポエムらしきものが映写されることも目を引くけれど、実はそれ以上に台詞が、あまりに赤裸々な、中嶋氏の身を切った独白に見える。それは、後半中嶋氏が眼鏡をとって素顔を晒していることに象徴されているようだ。だがしかし、綺麗に終わりそうなところであえてまた別にオチをつけようとするところが中嶋氏らしい。
　あ、生きてますよ自分。あと、隣で例のひとがすんごく笑ってました。私信。
　うん、いつか！たぶん！また！
[773] オトアン　　2011/07/30(土) 23:51　　[削除]
［公演名］逃げるのよ！ピノ子っ。　［劇団名］劇団第二黎明期
　　いまいまいこ。小出佳代子。第二黎明期ではない２人の女優によって演じられる、しかし第二黎明期としか言いようのない芝居。冒頭のダンス

的なパフォーマンスは、何となく微笑みを誘う(決して下手なわけではなく、たたずまいが)。そして黒子による場転。少しスタイリッシュなセット。スモーク。いろいろいつもと違うところもありつつ、しかしやっぱり黎明期だ。かつて新大・斎藤先生が「大きな物語」を語るのには向かないと評された通り、小さな物語を、あえて確信犯的に生み出し続けるシダジュン。シダ演出らしさ溢れる豊饒な固定化表情がはまるこの２人は、いずれも「上手い」「器用な」役者ではないと思うが、役に対して自分を重ねる姿がナチュラルで独特の感触を生み出す。今回もジョアンとピノ子というキャラクタと重なって実に可愛らしく愛らしい。

無邪気なるスリの名手ピノ子(小出)と他人、特にオヤジの心理を操る知能犯ジョアン姉さん(いまい)。金庫を狙う２人と並行して、誰かを追う２人の男たちの会話が入ってくる。ピノ子が現場に忘れた帽子を媒介として、一見この「仔犬姉妹」(ビッチね)を追っているかのように微妙に話がクロスオーバーするのだが、実は猫のブリーディングをシノギにしているヤ系事務所のチンピラであり、猫を追っかけていることがわかってくる。猫はピノコとジャック、舎弟格の男はオサム。そういう、ことだね。このあたりのミスリーディングは、しかし軽いもので、謎解きがこの芝居の主眼ではないのだ。男たちのやり取りはほのぼのした感覚をもたらしている。

一方、父親の違う姉妹２人は、かつて母親を強盗らしき男に殺され、施設で育ったらしい。妹ピノ子はおぼろに、しかも奇妙に捻じれた夢の形でしかその光景を覚えていないが､姉ジョアンは妹を守りながら何かを隠していて、実は母の死に深く関わっていた。これも、母殺しかと思わせて実は母親に恨みを持つ数多の男のひとりを操ったのだとラストで明かされる。この本筋とも言える姉妹の背景ですら、実は表現したいことのメインではない。神は細部(ディテール)に宿るという、まさにその細部、何気なく交わされる会話のウィットやユーモア、表情など、そこにこそこの芝居の生命線がある。今日も元気に逃げていく、それは何か具体的なものからではなくて、何かにとらわれることからの逃走｡自分はスキゾキッズのひとりかどうかわからないが、逃げていくことを宣言し駆けて行こうとする姿は、ビリビリ響いてくる。

黎明期の世界観にしっかり馴染む２人。それはそれでまた、ハンニャーズにおける小出佳代子、五十嵐劇場におけるいまいまいこを見たいなあと思わせる。楽しかった。

[772] さぼてん　　2011/07/24(日) 13:51　　[削除]

[公演名] そこにそれはあったとせよ

これはおそらく、あるタブーの物語である。そのため、その感想を書くことが適切であるかどうかはわからない。エウリデュケの片足が死の暗闇

の中にあるうちには、それを振り返ることは許されないからである。だが私たちはオルフェウスでない。エウリデュケでもない。それに似た何者かであるだけだ。そのようなメッセージを私は受け取った。私たちは永遠を生きる者ではないのである。それが絶望であるのか、希望であるのか。それは劇中のこの台詞に集約されているように思う。

「やっても、やらなくても、いい。」

具体的な感想に移ろうと思う。シーンは、「芝居の稽古」と、「現実の会話」に分けられていた（作者のイメージとは違うかもしれないが、一人の観客の受け取ったイメージとして、こう書かせてもらおうと思う)。だが、目の前で展開されるそれがどちらであるのかが明確にされるのは、暫くしてからである。「芝居の稽古」では、芝居の、口承伝承と、書物による伝承が行われていた。口承伝承の稽古の場面では、言葉は普段のそれより力を持って聴こえた。言いようのない「何か」が場を満たす。彼女らは確かに、代々語り継がれた物語を生きている人々に特有の強さを備えていたように感じられた。一方、書物による伝承チームはコミカルだ。書物から浮かび上がるとぎれとぎれの「物語」を、まず、単語の意味の推測から始めている。この２つのチームの入れ替わりで舞台は展開するのだが、虚は実に、実は虚に、シーンが折り重なる度に触発され合い入れ替わる様は見事としか言いようがなかった。最終的に、書物からの伝承チームの一部が、「伝承」の意味がわからなくなり、伝承行為自体を中止する為に舞台に爆弾を仕掛けようとするのだが、そこで、口承伝承の女の子達が、自分たちに伝承されてきた芝居を仕掛けた。「意味」はある。「物語」は生きている。そう、強烈に云っている様に感じられた。爆弾を仕掛けようとした男はそれに見入り、思い留まる。ここで「虚」は「実」になり、破壊を止めるという、文化の最大の実効力を発揮した。直後に暗転。この舞台はここで終わるかに思われた。奇妙な違和感。それを、突如始まった次のラスト・シーンの開始が狙い打った。

「意味なんてないのよ。」

口承伝承の女の子が言った。伝えられた物語を生きているように思われた彼女は、その時、自分の物語を生きていた。虚実入り乱れた、矛盾に満ち満ちた世界。
意味無しで「生きて行ける」人間などいまい。私たちは、ときに、伝承の中に安らい、新しい自分の物語を始めるのだ。そう思った。全てが失われたか

のような荒寥とした舞台で、そこでは確かに何かが生まれ出していた。

ところで、ロビーにいらした戸中井氏が、儚く消え入りそうにみえる時があった。氏は今、りゅーとぴあキッズ・コースＡＰＲＩＣＯＴの１０周年公演の準備に忙しいらしい。いま、大変多忙な氏と関って、氏の健康状態を心配している人は、もしかしたら、映画グラン・ブルーのラストのような心理状態になっているのではないかとさえ推測されるのだが、走り切った後、しっかり養生していただきたいものである。

[771] すて　　2011/07/07(木) 05:49　　[削除]
［公演名］俺の屍を越えていけ　［劇団名］ＷＡＲＰ
　　照明、音響の効果を最小限に抑えた一幕物のお芝居だったので、完全に演技の質が問われる舞台で、内容的にやはり厳しいものがあったと思う。
新人公演で、しかもアウェーだったということもあるのでしょうけど。
新人の方達には難易度が高かったかも。周りの熟練者の役者さんたちがもっと引きたててくれればいいのに。
ちょっともったいない感じでした。

新人公演にこのような演技勝負の脚本をぶつけてきたのは、新人公演だからこそのチャレンジなのでしょうか。
下手ではなけど、全体的に演技がちぐはぐにみえました。

第一回公演が非常によかったので、期待し過ぎていたのかもしれません。
新人公演としては評価される水準だったとは思うけど、それが言い訳にみえてしまい少し残念でした。

次回公演に期待しています。

[768] オトアン　　2011/05/17(火) 09:47　　[削除]
［公演名］風の底　庭の砂場に赤い花咲いた 2011　　［劇団名］劇団　共振劇場
　　劇団共振劇場第 10 回公演。目出度し。
　2007 年の「庭の砂場に赤い花咲いた」に見られた、社会に適応できない人たちの集まる場所という設定をベースにしながら、そこで行われていた箱庭療法とはまた別のアプローチの場を新たに作り上げている。ネタバレなので、未見の方はご注意。

いわゆるシャッター商店街の空いた建物を、行政が入手して、社会に適応できない人たちのための施設にしている。そこに集まる、女性たちの姿が描かれる。さまざまな症状を訴えて、周囲に適応できず会社を辞めた千里(大作綾)。自分はこうだから社会には出られないということを納得し、シャッターの内側に安住する。その元同僚で、仕事を続けながら何かと千里の世話をし、必要なものを車もないのに買い出しに行き、そして千里とともにこの場所に居る、明恵(石附弘子・演劇製作集団あんかーわーくす)。一番社会的で、まともに見える。そして、明恵と飲み屋で知り合い、意気投合して自分がメンタル的な病を抱えていることを話して、この場所にやってくる恵(まちゃ・フリー)。直接の知り合いでない恵が入ってくることについて千里を気遣う明恵。気後れを感じながらも、明恵への、そして恵への気遣いから普通に受け入れようという姿勢を見せる千里。新参者として遠慮しつつ、この二人の関係に何か違和感を覚える恵。

この辺りの細やかな感情が、抑えた台詞のやりとりの中から透けて見えてくるのは共振劇場ならではで、芝居の大半を占めるこの会話に入り込んでいくことができれば、その背景に広がる世界がどんどん見えてくる。こうした会話を、いかに嘘臭くなく自然にできるかということ、同時にそれが単なる日常会話そのもののトーンで普段のコピーであることのみ意識して行われると、メリハリもなくかえって不自然に見えてしまう。このバランスが難しい。稽古の繰り返しとともに、演者の意識がしっかりできていることが不可欠。共振劇場については公演によってある程度の揺らぎはあるものの、基本はできていると思う。

シャッターで閉ざされているが、その外でもほとんど人通りはない、さびれた街。高いビルも建つ中で、底辺のようなこの場所には風が通わない。「風の底」。それは物理的にも、心理的にもそうなのだ。換気扇なり、窓なりをつけて欲しいと当局に頼む千里たちの心理には、こうした閉塞状況に対する、諦めを含んだいらつきがある。形だけ整えて、血の通った親身な支援にはなっていない行政への、そしてそんな状況にある自分たちとは無関係の顔をして日常を営む社会の人々への、聞こえないくらい小さな抗いの声。

メンタルな病を抱え、それを自覚して社会に馴染めない自分を認めている恵から見ると、医者が原因を認められないさまざまな「身体的」症状を訴えて、自分が精神的な問題を抱えていることを認めずこの場所に埋没しようとする千里の姿は欺瞞に見える。そして、ついにそれをはっきり指摘する。それを諌めようとする明恵に対して、明恵もまた頼られて献身的に支える立場にあることを自ら欲しているという病理を突きつける恵。これはある種の共依存なのだ。わかってはいるが認めたくなかったことを指摘され涙する千里。切

ないシーンだ。この場所、この関係に風穴を開けるために、恵はトリックスタアとして必要な役割を果たしている。それは自らを高所において相手を哀れむような、おためごかしの世間の言葉とは異なり、自ら血を流しつつ言い放つ言葉である。巻き起こされた嵐は、しかしすべてを吹き飛ばすカタストロフとはならず、収束していく。傷つきやすいがゆえに完全には何かを壊せない人の姿。やがて眠りにつく彼女たちは、それぞれが赤いフレームの中に入り、言葉を呟く。このフレームは(少し強度不足に見えるが)舞台を抽象的に取り巻き、雑然とした狭い空間を表現すると同時に、イメージ的には町並みのビル群のようでもある。そして終盤は、ひとりひとりを包むベッドのような、棺桶のような、一種 SF 的な休息ボックスのようなスペースとして提示される。

人数が増えればさらに複雑な人間模様が描かれるしよりリアリティも増すだろうが、80 分で描く３人の群像としては過不足のない良質な芝居として成立している。アルカディア小ホールと新潟市黒埼市民文化会館、空間としてはあまり変わらなくても、恐らくいろんな面で進化していくであろう芝居。

[767] まいど　2011/05/07(土) 00:41　　[削除]
［公演名］シラノ･ド･ベルジュラック　［劇団名］kurita カンパニー

新潟大学斎藤陽一先生の芸能時評に、シラノ･ド･ベルジュラックがアップされています。

http://www.human.niigata-u.ac.jp/~y.saito/writing/kuritacyrano.html
[766] オトアン　　2011/05/02(月) 16:25　　[削除]
［公演名］シラノ・ド・ベルジュラック　［劇団名］KURITA カンパニー

KURITA カンパニーの内情はよくわからないのだが、本公演以外にもさまざまなところで公演を打ったり、メンバーの各種活動があったり、チラシやＨＰの面子を見て、あれあの人はと思ったり、いろいろ聞いてみたいとは思うのだが、それはそれ。栗田氏が東京でシラノの演出をしていることもあるけれど、カンパニーとしては初めてシェークスピア以外の作品。栗田氏は同じ戯曲でも公演毎に決して同じ演出にはならないので、興味津々なのであった。そしてそして。泣かされてしまったのであった。そもそも、報われない好意や善意の物語には弱いのだ。強烈な自負心・自尊心と裏返しの自己卑下・劣等感。アオいといえばそれまでだが、くうぅー泣けるでぇ。

万代市民会館の使いやすくはないフロアを、段差を利用し客席も使って物語に取り込む。冒頭、劇「外」劇というか、つぶれた芝居小屋「ブルゴン座」を稽古場所として集まる荒川(荒井和真)率いる劇団の面々が、上演されなかっ

た最終公演、ブルゴン座の十八番「シラノ」をさわりだけやってみるというシーンが入り、未熟な役者たちが名作シラノに挑む設定で普段あまり台詞のなかったメンバーたちにそれぞれ演技機会が与えられ、とても新鮮だった。もちろん力量の差もあるのだが、舞台に立つ緊張と喜びとが真っ直ぐに伝わってくる。舞台の終わりに、役者たちの顔立ちは変わっている。これは二重写しで彼らの成長を描く物語でもあるのだ。ブルゴン座の今川(今井明)の口から演劇を取り巻く厳しい環境が、そして精神の歯車が狂ってしまった座長でシラノ役者･栗山三吉(栗田芳宏)のことが語られる。ブルゴン(ブルゴーニュ)座での乱入の場面で、客席の暗がりから口上と共にシラノが立ち現れる姿。よくできた大鼻が帽子の影でリアルに見える。威勢のいい啖呵は日本の伝統芸能や大衆演劇に通じる。颯爽たり、栗田シラノ。

シラノを案じる友ル・ブレの今井明、同じくド・ギッシュに睨まれるリニエールの星野哲也。子爵の大家貴志、連隊長カルボンの小島のぞみ、青年隊士などの大渕聡子、そして教母などの大門和佳子、売り娘や教妹などの岡崎加奈、それぞれ複数の役柄をこなしながら、同時にそれを演じる劇団員としての姿も重ねられている。演出の上手さとそれに応える役者たちが見事。

詩人で理学者で剣客で文武両道の己に自負を持っているが密かに想いを寄せる従姉妹ロクサアヌ(山賀晴代)には鼻のコンプレックスから何も言えないシラノ。ロクサアヌが美男子のクリスチャン(永宝千晶)を想い、クリスチャンもまた想っていることを知り、恋の仲介をすることになる。クリスチャンを守り、弁舌の立たない彼の代わりに手紙や言葉を綴る。報われぬ自己犠牲ではあるが、醜い自分が美しい彼の姿を、彼は自分の文才口才を、互いに借りて二人で恋を成就させようとするシラノの心は、知らず勇んでおり生き生きしていたことも事実だ。

バルコニーの場で、すっかり彼女を失望させてしまったクリスチャンに言葉を授けつついつしか代わって自ら恋を語り出すシラノ。横恋慕するド・ギッシュ伯爵(荒井)により戦場に送り込まれ、苦境の中で危険な敵陣を越え、毎日恋文を出すシラノ。それはもはや自己犠牲というより彼の生き甲斐となっている。その中で、ロクサアヌは自分の愛するのは美しい外面ではなく、言葉の裏にある美しい心、精神であることを自覚し、戦場を訪れる。彼女の愛が真の意味で自分に向けられているのではないと知ったクリスチャンはそれをシラノに告げ前線で戦死する。死にゆく彼に、ロクサアヌは全て知った上でお前を選んだと優しい嘘を告げるシラノ。滂沱。

14年の時が流れ、修道院で暮らすロクサアヌに真相を告げぬまま毎週訪れて世間のニュースを語るシラノ。初めて、クリスチャンの(とされている)手紙をシラノに読ませるロクサアヌ。日が暮れた暗がりのなか手紙をそらんじる

シラノの声に、真相を悟るが、シラノはすでに死に瀕していた。滂沱滂沱。
　最後、シラノの台詞「俺の、羽根飾り(心意気)だ」は、栗田氏の目がくわっと寄り目になり、まさに大見得を切るようだ。芝居は終わり、羽根のついた帽子をクリスチャン役の役者に託して、栗山三吉は再び闇に消えていく。団員たちとともに、私たちもそれを見送るのだ。斜陽の演劇界、その波にもまれ消えてゆく老俳優と仏蘭西の快男児の姿が重なる。余韻のある終幕。拍手に応え揃った面々の真ん中で栗田氏が語った真摯な思いは、役者の真剣な眼差しとともに心に響いた。

[765] すてごろ　　2011/03/31(木) 02:15　　[削除]
［公演名］アロワナ最近　［劇団名］ハンニャーズ
　　まあ、こんだけいろいろレビューが並んだ公演だから…
今さら書くのも気が引けるんだけどね(笑)
ま、そんな見方もあるってところでヨロ。

大勢で分担する芝居ってのは、サッカーに例えると印象が伝わり易いと思うんだ。
サッカー…わかんない人も、今さらあんまり居ないから気にしなくて良いよね？
その例えで行くと、この公演はディフェンスが安定してたよね。
ディフェンスってのは、セットだったり、効果だったり、芝居のロジックを支える役柄だったり…
それを担当したのは、ハンニャーズの生え抜きだ。
男優が上手くなったねえ。
ちゃんとキープして、展開を考えながらセリフをさばけるようになった。
あんまり男優陣が良いから、僕の贔屓の女優ちゃんたちに物足りなさを感じてしまったよ(笑)
特に、ボランチ的な役割をこなした山田くんと横山くんが素晴らしい。
しっかりと、脚本・演出の戦略を具現化すべく汗をかいていたよね。

中盤は華やかだったね。
黄金のカルテットだ。
しかし、黄金のカルテットは勝負弱い(笑)
そこんところが、この芝居の弱点かな？
個々のやる気は、申し分ないんだけどねぇ…
個人技(チカラワザ)に依存し過ぎで、決定的なパスが出ない。

多分…、お互いをまだ良く理解できてないんだろうね。
勿体ない話だけれど、こういうスタイルのチーム編成ではよくある事だ。
で、結果的に決定力不足。
ストライカーやシャドウが不在な編成なのは、予めわかっているんだから…
戦術として、もう少し工夫が必要だったんじゃないかな？
これは、結果論じゃなくて、論理的な必然です。

以上、わかる人にだけ判れば良いレビューでした(笑)
好き勝手言って…
ごめんね、ごめんね～！

[764] オトアン　　2011/03/28(月) 17:14　　[削除]
［公演名］地球の日本のコント集　［劇団名］中央ヤマモダン第 18 回国内外向けコントライブ
　　国内外向けコントライブ、地球の日本のコント集、というのはユーストリームでインターネット生中継されるということもあるけれど、まあお茶目っていうか洒落っ気だよねぇ。
　で、いそいそとちず屋の二階に上る。ここからはネタバレですから、未見の方は目をつぶってね。
中央には白幕にタイトルが朱く染められ、まあ日の丸ぽいけどそれよりずっといい。幕の上から何やら白いうにょうにょが覗く。後で幕が取り去られると、www.chuo-yamamodern.jp の立体ロゴとわかる。合板剥き出しの床、奥はモノトーンに黒い木枠があり、そこにいろんな抽象的図形が掛けられ場を変える。そして下手には各ネタのタイトルが貼られている。そんなヤマモダンな舞台。ただし。ううっ、こ、これは！中央ヤマモダン CYM のゆるさは残しつつ、意外なほどしっかりしたコントになっている。それはまさに、シダジュンの存在によるものだ。黎明期の初期を知っている方々は皆そうだと思うが、シダさんには剃刀のようにシャープでかっこいいイメージがずっとある。そのシダさんが、おじさん(じいさん)キャラ全開で CYM に対する異物としてそこに在る。ある意味ミスマッチな不思議さで、妙な気持ちよさがある。化学変化、かな。面白かった。
①その親父のせり」(シダ作)。オヤジ(シダ)を囲む CYM の面々(江尻、小田島、中林)が山本氏のかけ声でせりを始める。価格でなく、年齢。そして、最高齢を出した人がオヤジをゲットして去る、このシュールさ。短くピリっと締まっている。
②「縁談」(江尻晴夏作)。男(山本)と向かい合う女(江尻)と年配らしき男(シ

ダ)。父親かと思えば、女の連れ子。言葉や所作はおっさんだが、子どもという設定の妙。なかなか「お父さんだよ」と言えない男をいなす連れ子。
③「風呂場からの電話」(江尻作)。待ち合わせに遅れそうなビジネスマン(山本)が携帯で連絡すると、先に着いた相手の声は風呂場の音とエコーを伴っている、ワンアイディアだがやたらおかしい。
④「晩春」(山本作)。年老いて惚けていく感じの父(シダ)と、気遣う娘(江尻)。小津的なホームドラマのようでいて、一筋縄ではいかない。もう、お父さんたら。
⑤「上品な白鳥の湖」(江尻作)。パンストに綿を詰め嘴をつけた白鳥たちを身にまとい、踊る大御所(シダ)と下っ端(山本)のダンサーコンビ。上品か？山本のつぶらな瞳がおかしい。
⑥「愛煙家」(江尻作)。喫煙席でスパスパの山本とシダ。ヤンキー風のシダさんが一頃を思わせる。喫煙家の形見の狭さを嘆き、世間の冷たい視線に憤慨しているが、その冷たい視線にはまた別の理由が。
⑦「ふくろうの館」(シダ・中央ヤマモダン作)。夜目が効かない、シダと山本。電灯のスイッチを求めて手探りするが、突然スイッチがつくと目がやられる。終わったかと思ったら、バックライトでふくろうが浮かび、腕にとまらせるシダ。くすぐり。
⑧「熱血！昔話部」(シダ作)。各自昔話を自主練で語っている部員たちを集合させるコーチ(シダ)。大会での勝利を目指し、「わらしべ長者」を中林に語らせる。自信がないので途中から妙な話になっていくのを、周りの部員たちがかけ声・合いの手を入れつつ励ます。
⑨「課長と田端」(山本作)。ぼりぼりとキャットフードを食べ食べ失踪した猫のことを語る課長(シダ)の話を聞く OL(江尻)。先日の富士山登山で山頂の写真の背景に富士山が写っていると執拗に OL に語る田端(山本)。お互いの話の噛み合わなさ加減が、とっても CYM 的。
ネタによって、ああ CYM ぽいというもの、シダさんぽいものはあるけれど、やはりいつものそれとは一味違っている。つなぎもいつものダラダラでなくどこかちゃんとしていた。でも別ユニットでなく、中央ヤマモダン公演という、このフトコロの広さ、漠然さが CYM だなあ。
深い時間、毎度ばかばかしいお笑いがとても嬉しい。

[763] わおん　2011/03/25(金) 23:29　　[削除]
　　[公演名] アロワナインドラゴンパリス　[劇団名] 劇団ハンニャーズプロデュース公演
　　詳細 URL を落としました。

http://www.human.niigata-u.ac.jp/~y.saito/writing/arowana2011.html

です。失礼しました。
ついでですが、こうやってあれこれ考えながらレビューを書く人たちがいることは、演劇人にとって幸せなことではないでしょうか。

[762] わおん　2011/03/25(金) 23:23　　[削除]
[公演名] アロワナインドラゴンパリス　[劇団名] 劇団ハンニャーズプロデュース公演
　　新潟大学斎藤陽一研究室・演劇時評にアロワナインドラゴンパリスアップです。
http://www.human.niigata-u.ac.jp/~y.saito/writing/critique.html

素晴らしい分析力、その背後に愛があります。

[761] オトアン　　2011/03/23(水) 11:09　　[削除]
[公演名] Arowana in Dragon Palace　[劇団名] 劇団ハンニャーズ　プロデュース公演
　　内容、ネタバレ。
　シーマニア島リンチ城の一室に固定された舞台。よく作り込まれた壁、ホリゾントの色を透かす壁の継目などしっかりしたセット。塩をめぐる戦争が勃発、塩が入手困難(周りの海からいくらでも、と思うが設定は特に重要ではない)で、代用品としてウミトキの血から作るサルトが出回るが、ウミトキの自衛なのか血液は毒化し、サルトは一定以上の摂取で脳が溶ける「ダグオン病」を引き起こす。そんな時代。ダグオン病の研究に挑むリンチ・ランド(姿を見せない)の居城。使用人サンド・レベル(山田好宏、気の弱そうな感じがピッタリくる)は在宅のまま戦況レポートをでっちあげて投稿しウミトキの放送で読まれるのを楽しみにしている。妻のローザ(谷藤幹枝、美しさの中で狂気が眼に宿る)は奇矯な振る舞いが目立ち、ダグオン病の不安に苛まれて各種検査薬を試している。この二人は周囲に隠れて何か死体袋のようなものを運んでいるが、この「30日目」の終わりに津波が襲って来る、ここからすでに仕掛けが始まっている。
　1時間後、1日目。何事もなかったかのようなリンチ城。ローザの連れ娘ライカ(熊倉静、ロリィなコケットリィ)は10歳だがすでに思春期後期のよう

な色香を漂わせ、リンチの息子ワルツ(横山泰之、おばかをナチュラルにやれるヨコヤマ節)に思いを寄せている。ワルツも憎からず思っていたはずが、今は父リンチの後妻で外国人、霊媒体質(笑)のマニエラ(小出佳代子、独特の飄々とした風情が無比)を恋慕している。ライカはマニエラに言葉を教えながら、静かに憎しみの火を灯している。ライカと継父サンドの間には
性的関係があったことが暗示されている。ワルツの使用人マイタック(逸見友哉、気障ったらしくなる後半が特に彼らしくて面白い)は、マニエラの情報を得ようとするワルツのために盗聴器を仕込んだ造花トンガッチャを作ったりする。彼はリンチの人体実験で妻が行方不明になったことに密かな恨みを募らせている。この城には、旅人オトマール(村井孝昭、久しぶりに彼の芝居が見られて嬉しい)が滞在しているが、ダグオン病に冒されサルト採り放題、エキセントリックなキ〇ガイぶりを見せる。そして、やってくるカプリ・エンド(志田実希、充実した肉体、しっかりした感情表現)。アノラックのような防護服から現れるエージェントの姿(関係ないけどグレーのコットンの汗ってフェチいなあ)。かつて彼女はサンドと恋愛関係にあったのだが、この城の秘密、訪れたものが姿を消すこと、時間が過ぎないという噂、そして研究のため城を訪れ姿を消した夫の捜査に乗り出す。まさに、「エンド」をもたらすのは特異点としての彼女なのだ。カプリの前に姿を現すワルツの妹タンゴ(山川祐賀子、どうしちゃったのというくらい白い無表情顔で怪演)は、できの悪い兄を愛するあまり馬鹿な振りをしているというのだが、実は既に(ヒグマと戦って)死んでいる。

話は１日目、３日目、２５日目、２９日目と進んでいくのだが、恐らく３０日で何かがリセットするということは感じられる。詳細な種あかしはパンフレットの袋とじにあるが、３０日間城の敷地内に留まり続けるとその３０日目で２９日前にその人間が戻る。通常の時間帯１カ月が、その人にとっては１日になる。こうして外界と城の中で時間のずれが生じる。まさに、竜宮城(ドラゴンパリス)。途中で城から出ると発動しないのが厄介な条件。ちょうど津波の来る３０日から３１日の間にやってきたカプリは、ねじ曲げられた時空にある。本来同じ時間と空間に存在し得ないものがそこに在ることで生じる様々な事件。奇天烈な設定は、深く考えることはない。普遍的な人間の姿が見えてくる。浮かび上がってくるのは、ばかばかしいほどの悲劇と絶望。その背景にあるものは、それぞれの愛情。しかしそれは歪んでいる。誰もが異常で、誰もが加害者で、かつ被害者で、誰もが誰かを愛していて、誰もが哀しい。

ばたばたと人が倒れ、しかし異なった時空ではまだ生きている、これは悲喜劇だ。サルトは脳を溶かすが、摂取し続ければ死ぬことはないという、こ

れもまた悲喜劇だ。そしてやって来る津波を前に、叫ぶ(パラレル時空の)オトマール。窓の外は次第に大きくなる光と轟音に包まれる。カタストロフ、かも知れないが、自分には人々の絶望的な祈りを乗せてギガサリアンが救済のために訪れた、救いの光明に見えた。中嶋氏は、最終的にとても優しいひとだと思う。僕はね。

[760] オトアン　　2011/03/23(水) 11:07　　[削除]
［公演名］Arowana in Dragon Palace　［劇団名］劇団ハンニャーズ　プロデュース公演

　　コント以外のハンニャーズ（正確にはプロデュース）公演を初めて観た同行者は、終演後しばし無言だったが、やがてポツポツと語り出した。「気持ち悪くなって吐きそうになった」「なんて暗い、黒い」「でもすごい」「面白い」…途切れ途切れだが、止まらない。台詞も覚えているほど、まっすぐに芝居を観て、理解して、出てきた言葉だなと思った。
　いろいろな仕掛けや笑いの要素はあっても、ここで示されている世界観は基本的にダークだ。初演を見ている自分にもガツンときた。これは、いくつかの要素が重なってのことだと思う。ハンニャーズ（中嶋作品）が持っているいい意味でのアンリアルさ、人物造形は丁寧だが背景にあるものを重く引きずらないコント中のようなキャラクタとしての役中人物で、独特の「かろみ」があり、そこが陰惨な話を救っていたような感じを受けていた。シーマニアとか、ダグオンとか、名詞だけでもその世代ならふふっとなるしね。
NYLON100℃から受けているいい意味での影響は、音響、映写による説明を含めた異世界の構築、どろどろの悲劇をあっけらかんと笑いながら見せるところなどに顕著なのだが､今回は外部の kenzo さん演出ということもあって、エキセントリックながらも役により血が通って、その分悲劇性が薄められずに表に出てきたように思う。ent.というハコの特性でもあるが、目の前で繰り広げられる息遣いすら感じる近接感の中、特に女性の、むせるような生・性のにおいが濃厚に感じられた。ギリシア以来連綿と続く、血の悲劇。
パンパン銃声が響き、どんどん人が死ぬ。ほとんど、みんな。これを、もはや痴呆のようにゲラゲラ笑いながら見ているしかないのがこの作品だったと思う。今までの中嶋作品に比べ、笑いがちりばめられているとはいえ、笑わせようという気負いはなくむしろストレートプレイになっているのだが、今回はそれが特に顕著で、笑いが主要素でなくなっている。
理由はいくつか考えられる。一つは演出家が違うこと、役者が違うこと。話が津波というあまりにタイムリーな今回の災害を連想させること、それもあってか役者たちのテンションが非常に高く緊迫感は持続する２時間だったこ

と、そして観る側の精神状況もある。ただその分、見終わって引きずるものが大きい。いずれにせよ、また忘れられないカンゲキ体験となった。
内容については別記。

[759] 758すてと同じ 2011/03/11(金) 14:36 [削除]
［公演名］アイ・ペッポ・パッピ ［劇団名］劇団スリランカ
758にてﾗｲﾌﾞ全体と演目の感想の感想を述べた者です。演技も印象深かったので役者の皆様について追記させて頂きました。
【役者さんも皆さん素敵です】
ある意味で定番の新しく、という印象のライブでしたが、役者の６名がコントに凹凸を出してました。
抜けや隙を持ち味とするメガネの方､表情発声･間がナチュラルな短髪の方、個人的に思うに、この２名様がカチッとしがちな舞台コントの中で重要だったのではないかなぁ、と、今、思いました。笑いを身近に持ってくると言うのでしょうか・・・。あくまで例えですが、オチケンのクラスメイトより野球部のクラスメイトのが面白い、という事ありますでしょ、瞬発力や会話相手との距離感が、お上手で。
短髪の方は笑いへのセンスが演技へと繋がっている印象です。
また、女性の方が素晴らしかった。美女から目が離せない、この方を観れて当日 1000 円は安い、いけない６名皆様を堪能せねば・・・と葛藤していたのですが、笑いの表現も最高でした。ネタの内容を活かし演技で超える、という素晴らしさ。面白かったです～。「カップルコント」では可愛い声と浮かれっぷりが本当に面白く､「落盤コント」ではネタの進行とボケのサポートに徹し､「サッカーコント」ではともすればオバハン？という声と気迫と（※顔はずっと可愛い)､浅草を思わせるノリを魅せつけて下さいました。笑いへの繊細な演じっぷりに感動しました。(帰宅後、今日は笑い表現に長けた女性に出会えた最高の一日だった、永宝さんと仰るのかぁ、名は体を…と耽っていたところ､急に KURITA カンパニーさんの永宝氏だ､と気付き狼狽しました。笑いの女神かと思ったのですが、笑い以外にも素晴らしい方でした。ヴェニス商人も良かったです)
ライブ全体を通して話が入って来やすかったのは、軸となっていた３名の男性の方のおかげかと思います。
整った顔立ちの眼鏡の方のおかげで全体が見やすかった、そして進行やつっこみに愛嬌がありました。
ハンチングの方の、ここは笑うとこだよ、というコント的表現がライブ全体を笑いやすくしていたのかなと思います。

動きと表情が本格的なダンスの上手な方は、固そうに見え、本格的に見え、全力で馬鹿な動きをしていて面白かったです。ニュートラルに見えて爆発力をお持ちだと思いました。
次のラストライブを銘打った公演を、やっぱり心待ちにしております。それまでの個々の皆様の活躍も期待しております。
（ｺﾝﾄ好きとしましては、ｺﾝﾄ好きの方とｽﾘﾗﾝｶさんがこちらのﾚﾋﾞｭｰに目を通して頂ければと願っております）

[758] すて　　2011/03/11(金) 14:32　　[削除]
[公演名] アイ・ペッポ・パッピ　[劇団名] 劇団スリランカ
　　面白かったです。
【ネタの骨と着地がしっかりしているという印象です】
ストーリーと設定がしっかりとあり、それを踏まえた正統な小ネタが、観ていて気持ちが良かったです。与えられた設定の中で、テンポよく真っ向勝負なボケが繰り出され、コント１本１本が印象深いです。
しっかりした構成であるからこそ、ときたまある変則な流れや遊びに、妙に愛着が湧きました。
（そういう訳で「落盤コント」でダンサーの方が、急に傾斜したところが全体の中で一番好きです。「兄弟が死んだコント」でおかまの方が感情を爆発させるところで一番声を出して笑いましたが、ネタ的には、ダンサーの急な傾きが一番でした。）
ツイッターシリーズは毎回設定と雰囲気が変わって、オチまでに色々な形で笑わせてくれます。お得、ありがたいです。
「・・・なう」でオチ、なのですが、パターン化も期待が満たされてお客様思いなのですが、変則も見たかったかもしれません。ウィル以上の変則で、もうウィルとばして英語で、I am just ～ing now　とか。あくまで好みです。面白かったのです。
その徹底ぶりが劇団スリランカさんとしての約束・信念の部分でしたら本当に申し訳ありません、
コント全体が意表をついたものが一つあっても好きだなと思うのです。(劇団ハンニャーズさんはそういうコントがある印象です。それがツボにはまるとその公演が大好き公演になる、からこういう事をﾃﾞﾘｶｼないなと思いつつ申してしまう）
意表コントの話の流れですが、「ぐんぴょん」については、この単語を覚えているという事は、エンペラーズさん公演を思い出すという事は、十分キラーワードという事なのかもしれませんが、難しかったです。変なルール、ロジ

カル、テンポ、天丼、の要素はあるけど、どの要素も特化していない印象。笑いも起こっていたので、面白いのだと思います。
しかし難しかった。頭の良い人が天晴れと大笑いするか、感覚重視の人がヨダレ出して爆笑するか、どちらかを狙ったぐんぴょん３回目を見てみたいです。鈍い私の、あくまで個人的希望です。
「エアー部」が好きでした。設定とお題がカチとしていて、特別ストーリー展開がない、その分ボケに力を感じました。潔くて好きです。
ライブ全体は、安心な笑える空間を生み出していて楽しい時間でした。設定と人間関係とストーリー展開のあるコント､正統勝負の小ネタ(ギャグ的な)、で楽しませるというのは、台本演出役者スタッフの皆様の力と思います。
次のラストライブを銘打った公演を心待ちにしております。

[757] すて　　2011/03/09(水) 00:53　　[削除]
[公演名] アイ・ペッポ・パッピ　[劇団名] 劇団スリランカ
　　斉藤氏のその既視感の謎はこちらのげんぱ氏のブログで解決するでしょう。
http://blog.livedoor.jp/genpagiga/archives/52152761.html

そして、実は斉藤氏自身、書いているんですよ。その既視感の原因。
http://www.human.niigata-u.ac.jp/~y.saito/writing/emperors.html

あっ、ついつい、こちらにのっけちゃいましたが、そぐわなかったら削除してくださいませ。

[756] すて　　2011/03/07(月) 22:56　　[削除]
[公演名] アイ・ペッポ・パッピ　[劇団名] 劇団スリランカ
　　斉藤陽一氏の劇評更新！
評判イイネー
チェキラー

http://www.human.niigata-u.ac.jp/~y.saito/writing/srilanka.html
[755] オトアン　　2011/03/07(月) 15:33　　[削除]
[公演名] 劇団スリランカ　ラストコントライブ　アイ・ペッポ・パッピ
[劇団名] 劇団スリランカ
　　「劇団スリランカ」。え、そんなのあったっけ。「ラストライブ」。ええっ、もう？「アイ・ペッポ・パッピ」。えええっ、ナニそれ！･･･という

ことで、知らないことが多いほどオトメの胸は高鳴るのドッキドキ。
とはいえ、星野哲也、傳川光留、永宝千晶、KURITAカンパニーで見る名前が６人中３人いるので、へえーこういう別ユニットもあるんだ、という興味がワックワク。これは楽しみだワン。
シアターent.の黒い空間でいろんなコントが繰り広げられてきた。今回のスリランカは、とてもしっかりしたコントになっていたと思う。中央ヤマモダンのような脱力系とは対極で、芝居的な上手さをベースに、シュールなネタも含めてよく練られた作品。
オープニング、暗い中にメンバーが揃って並び始まる「アイ・ペッポ・パッピ」。「今日」を中心に一昨日と明後日、昨日と明日が対峙する。そして「この言葉をきみたちに贈ろう
アイ・ペッポ・パッピ」と謎の言葉を何の解説もなく投げかけるシュールさ。
「ツイッター＜張り込みなう＞」。犯人を張り込む刑事ハンチング(江口雄介)と、後輩の刑事タンクトップ(傳川光留)。肉体を誇示するかのような服装の後輩タンクトップが勧める新しいもの(ドロリッチ、モッフル、ツイッター)に拒否感を示しながらも、体験するとその魅力にハマるハンチング。犯人のツイートや署長のツイートに振り回される２人。
「人違い」。某外人アーティストのバックダンサー・ナカガワ(星野哲也)がステージから転落、傷心の帰国をする空港では、スリランカで起きた落盤事故で奇跡的な生還を遂げた(と報道されている)カガワ(和田卓之)が取り違えられてレポーター(永宝千晶)にインタヴューされる。その気になってマイコーばりのダンスを見せるナカガワと、ちょっかいを掛けて無視されるカガワの惚けた味わいがいい。
「ぐんぴょん meets Sri Lanka Company」。再び勢揃いした面々が、横一列でルールがなかなか見えないゲームに興ずる。隠されたルールがシュールさを醸し出しナンセンスで笑える。
「ツイッター＜デートなう＞」。女(永宝)と男(内藤陽介)のデレデレバカップルぶりから、最初はのろけている女が次第に相手への不満を直接でなくツイッターで呟く。下ネタも、永宝さんは下品にならないからいいなあ。
「ミーティング」。サッカーのハーフタイム、30対０という点数に憤慨する女性コーチ(永宝)と、ボケをかましまくる男性陣。永宝さんのノリツッコミがかわいい。
「ツイッター＜少年を助けに行くうぃる＞」。ハンチングがツイッターを始めたが誰もフォローしてくれずやめようとしているところに、デートでふられた男(内藤)がビルから飛び降りようとしているとタンクトップが知らせ、

駆けつける。会話をしながら、思いとどまらせようとするが･･･。
「エアー部」。エアーでバンドをやっているヴォーカル(星野)、ドラム(傳川)、そしてリコーダー(和田)。サッカー、野球、なかなかヴァーチャルでの自己解放に馴染まない和田を何とか盛り上げようとする２人。オセロやスカートめくりやらさんざんやってみるが･･･。
「兄妹」。白い布をかけて横たわる男ジロー(和田)、傍らで涙する女(永宝)、そして「きれいな顔してるだろ」と例の台詞を呟くシロー(傳川)。蜂に刺されたショックで倒れたが死んでいないジローをネタにタッチごっこをしている。知らせを受けた兄イチロー(星野)、おかまのサブロー(内藤、怪演！)らがかけつけ、タッチごっこを繰り返す兄妹。そこに現れたハンチングが、ジローの「白い粉」を摘発するが、死人に咎めなしと立ち去る。ほっとする兄妹、だが結局ジローが生きていることがバレて慌てる。この時のシローが、役者志望からハンチングにならって刑事(タンクトップ)になる、というオチ。
こうしてオムニバスながら全体にまとまりもあって、よくできた公演だと思う。ちょっと素に見える演者の笑いすら実は計算されている。ネタひとつひとつの爆発力はもう一つ欲しいところだけれど、江口、内藤、和田といった特異なキャラクタがなかなか面白かった。また見たいんだけどなー。やらないかしら？

[754] オトアン　　2011/03/07(月) 13:09　　[削除]
[公演名] 堀川久子　独舞　「栗田宏　点　華雪」会場にて
堀川久子は夏秋の各地土着の盆踊りなども手がけているけれど、印象としてはいつも寒風吹き荒ぶ中で心身ともに戦き震えながら観ている記憶が強い。堀川氏の表情、身振り、存在そのものが喚起する荒漠とした光景は寂しく凛としている。
砂丘館の蔵、そして和室。和の空間に展示された栗田宏の細密で幽かな絵画と、華雪の絵画的ですらある書の中で、それらの作品と響鳴しながら、蠢く「独舞(ひとりまい)」。
蔵の一階、その奥に佇み、ゆっくりゆっくりと揺れるように動き始める。栗田氏の絵は、細かい鉛筆の点を執拗に重ねている。炭素と鉛の融合の微細な粒子。一方、文字という意味性を持つ存在でありながら、そのかたち、筆跡、筆勢でさまざまなものを表現する書。これもまた分解していけば紙の繊維に絡んだ墨の粒子の集積である。私たちもまた、この世界の中でただひとつの点なのだ。
原子レベルにまで、深く感応しているかのような、永い永い時間をかけて作品と対峙しながら、浮かんでくる感情を美醜に拘ることなくそのまま表し

ていく。黒いワンピースのその姿は、女の情念を示すような禍々しさもあるがまた同時に童女のような無垢さをも感じさせる。だからこそ、目をそらしたくなるような、でも目を離すことができないような、アンビバレンツな感覚に捕らわれる。自分の中で覆い隠しているものが噴き零れているのを見るような、見てはいけないものを見ずにはいられないような。

場が変わり、蔵の二階へ誘われると、そこではトレンチコートを羽織った堀川氏が、華雪氏の書が並ぶ中で、一転鋭く激しく舞う。電子音の中、コンテンポラリーダンスのようで、かつ舞踏としか言いようのない、舞。よく見れば、「耳」と書かれた華雪氏の書が張り巡らされた空間は、また別種の異界である。

そして場は一階和室へ。木々が仄明るく照らされた庭を背景に、風や鳥の声などの自然音の中で、舞は静謐さを湛え、やがてガラス戸を開いて冷風が室内に吹き込む中、外に飛び降りて行く。こうして、一連の舞が終わり、客に礼をする堀川氏の表情は憑き物が落ちたような静かなものとなる。私たちもふっと息をして、この体験を胸に抱えて散っていくのだ。